

山頭火著作集 I

あの山越えて



酒に生き、旅に生き、句作に生きた放浪の俳人山頭火——最低の中に最高を
生きた類い少ない人間の文学である。

山頭火著作集 I

あの山越えて

大山澄太

明治32年岡山県井原市に生まる。逓信省事務官，内閣情報局満州国郵政総局病託。戦後，個人雑誌「大耕」主宰。愛媛県社会教育委員。愛媛県教育文化賞を受く。俳禅修業40年。「日本の味」「般若心経の話」等著書多数あり。山頭火の顕彰に努む。

昭和51年6月25日発行

© 新装版

編者 大山澄太
発行者 小島米雄
印刷所 文雅堂印刷株式会社

発行所

〒160
東京都新宿区坂町23番地
電話東京(357)3261(代表)
振替・東京4-69107

株式会社 潮文社

著丁本・乱丁本はおとりかえします

(東京美術紙工)

0295—0085—4664

山頭火著作集(一)

あの山越えて

大山澄太編



阅读结束

请在线购

序文

山頭火の遺著の随一ともいふべき行乞記が、「大耕」の誌上に連載せられたのを、愛読した一人として、それが今しも単行本として大山澄太さんから出版されるについて、序文をかくことになったのは、前世の因縁めいたものがないでもない。

淡泊、清純、洒脱、高逸、こんな形容語が当るかも知れない山頭火の風格は、その写真や俳句などで、ほぼ窺はれるかも知からぬが、私は元より一度も出会ったことはなかった。対比すべき私の空想は、西行や芭蕉や愚庵や、そのほか古今幾多の飄然たる行脚僧や遍歴詩人などの似寄りさ加減を吟味して見ることもあった。しかし、この行乞記のごとき遺作は、果して他の行脚人によって残されたかどうか。

私は山頭火の郷土とは近い周防の山口に生れた。何十何年まへになるのかは知らないけれども、山頭火と同郷人めいた一種の關係が、一層彼に向って私の親愛感をつよくしたことは争はれなかった。それに老境ますます秋冬の交に降る時雨の情景を愛してやまない私は、行乞記の

中に往々散見するところの時雨の情趣を叙した断簡を、私のしぐれ帖なる鐘礼記に抄録しておいたものがある。昭和六年十二月三十一日の記事、筑前飯塚町において吟じた自嘲の一句

うしろ姿のしぐれてゆくか

私はこの句が非常にすきだ。同月二十七日に太宰府参拝のとき「天満宮の印象としては、樟の老樹ぐらいだらう。さんく雨に濡れて参拝して帰宿した。」とあって、太宰府の句が二句書いてある。

右近の橘の実のしぐるるや

大樟も私も犬もしぐれつつ

樟樹が大好きな私は、この二句にも異常に心がひかれた。芭蕉にも宗祇にも、なささうな詩境だと思った。

そこで妙な靈通で、大山さんから、この序文を頼まれた数日前のこと、偶々奥の細道を見る必要が生じて、岩波文庫本の架上から、その本を取出して明けてみたところ、その本のトピラに、右がはに、昭和二年十月二十六日と録して、「鹿児島より日豊線を経ての帰るさ、下の関にてこれを求め、山口を訪ふ道、京に回る道によみぬ」と附記し、その左がはに、「なつかしやうまれ故郷の初しぐれ」と即興の一句をかき、「二十六日夕ぐれ山口にて」と註してある

のが眼についた。山口にその後「年たけて」再遊したことは憶えているが、奥の細道を、馬関で買ってこんな文句を万年筆で書いたことは全く忘れて居たのである。

山頭火が山口あたりの行乞は何年幾度目かは今すぐしらべることが出来ぬが、此度その紀行文が単行されるので、早く読むのをたのしみにしてゐる。

昭和二十七年四月八日の佳節に

洛北小山居にて
新村 出

行乞記

——昭和五年九月より九州地方——

このみちや

いくたりゆきし

われはけふゆく

しづけさは

死ぬばかりの

水がながれて

山頭火

夜は早く寝る。脚気が悪くて何をする元気もない。

昭和五年 九月九日 晴。八代町。萩原塘吾妻屋（三十五銭、中）

私はまた旅に出た。愚かな旅人として放浪するより外に私の生き方はないのだ。

七時の汽車で宇土へ、宿においてあった荷物を受取って、九時の汽車で更に八代へ、宿をきめてから、十一時より三時まで市街行乞、夜は饑別のゲルトを飲みつくした。同宿四人無駄話とりとくで面白かった。殊に宇部の乞食爺さんの話、球磨の百万長者の欲深い話などは興味深いものであった。

九月十日 晴。二百廿日。行程三里。日奈久温泉織屋。（四〇銭、上）

午前中八代行乞、午後は重い足をひきづって日奈久へ、いつそや宇土で同宿したお遍路さん夫婦とまたいっしょになった。

方々の友へ久振に——ほんたうに久振に——音信する。その中に——

……私は所詮、乞食坊主以外の何物でもないことを再発見して、また旅へ出ました。歩けるだけ歩きます。行けるところまで行きます。温泉はよい。ほんたうによい。ここは山もよく海もよい。出来ることなら滞在したいのだが、いや一生動きたくないのだが（それほど私は疲れ
てゐるのだ）

九月十一日 晴、滞在。

午前中行乞、午後は休養、此宿は夫婦揃って好人物で、一泊四十銭では勿体ないほどである。

九月十二日 晴、休養。

入浴、雑談、横臥、漫読、夜は同宿の若い人と共に活動見物、あんまりいろいろの事が考へさせられるから。

九月十三日 曇、時雨、佐敷町川端屋（四〇、上）

八時出発、二見まで歩く、一里ばかり、九時の汽車で佐敷へ、三時間行乞、やっと食べて泊るだけいただいた。此宿もよい。爺さん婆さん息子さんみんな深切だった。

九月十四日 晴。朝夕の涼しさ。日中の暑さ、人吉町宮川屋（三五銭、上）

球磨川づたひに五里歩いた、水も山もうつくしかった。筧の水を何杯飲んだことだらう。一勝地で泊るつもりだったが、汽車でここまで来た。やっぱりさみしい、さみしい。

郵便局で留置の来信七通受取る。友の温情は何物よりも嬉しい。読んであるうちにほろりと

する。

行乞相があまりよくない、句も出来ない。そして追憶が乱れ雲のやうに胸中を右往左往して困る。

一刻も早くアルコールとカルモチンを揚棄しなければならぬ。アルコールでカモフラージュした私はしみる嫌になった。アルコールの仮面をはなれては存在しえないやうな私ならば、さっそくカルモチンを二百瓦飲め。

呪ふべき句を三つ四つ

蟬しぐれ死場所を探してゐるのか

青草に寝ころぶや死を感じつつ

しづけさは死ぬるばかりの水が流れて

けふのみちのたんぼぼ咲いた

朝は涼しい草鞋ふみしめて

あの雲がおとした雨にぬれてゐる

岩かげまさしく水が湧いている

ここで泊らうつくつくぼうし

炎天の下を何処へゆく

雲かけふかい水底の顔をのぞく

単に句を整理するばかりぢやない。私の過去一切を清算しなければならなくなつてゐるのである。私もやうやく『行乞記』を書き出すことが出来るやうになつた。

私はまた旅に出た。――

所詮乞食坊主以外の何物でもない私だつた。愚かな旅人として、一生涯流転せずにはゐられない私だつた。浮草のやうに、あの岸からこの岸へ、みじめなやすらかさを享樂してゐる私を、あはれみ、且つよろこぶ。

水は流れる、雲は動いてやまない。風が吹けば木の葉が散る。魚ゆいて魚の如く鳥とんで鳥に似たり。それでは二本の足よ、歩けるだけ歩け、行けるところまで行け。

旅のあけくれ、かれに触れこれに触れて、うつりゆく心の影を、ありのままに写さう、私の生涯の記録としてこの行乞記を作る。

九月十五日 曇後晴。当地行乞。宿は同前

けふはずいぶんよく歩きまはつた。ぐったり疲れて帰つて来て一風呂浴びる。野菜売りのお

ばさんから貰った茗荷を下物に、名物の球磨焼酎を一杯ひっかける。熊本は今日が藤崎宮の御神幸だ。絵馬のボシタイ〜の聲が聞えるやうな気がする。何といつても熊本は第二の故郷、なつかしいこと限りない。

あはれむべし、白髪のセンチメンタリスト、焼酎一本で涙をこぼす。

この宿はよい、若いおかみさんがよい。世の中は親切ほど有難いものはない。それにしても同宿の支那人のやかましさはどうだ。もっと小さい声でチィ〜パァ〜やればよいのに。鮮人はだらしないうこと日本人同様、ツケアガルこと日本人以上。支那人は金貯め人種だ。行商人の中で酒でも飲んでゐる支那人をみたことがない。昨夜は三時まで読む、今夜もやっぱり寝つかれないらしい。

九月十六日 曇。時雨。人吉町行乞。宮川屋（三五銭、上）

けふもよく辛抱した。行乞相は悪くなかったけれど、それでも時々ひっかかった。腹は立てないけれど、不快な事実に出くわした。

人吉で多いのは、宿屋、料理屋、飲食店、至るところ売春婦らしい女を見出す、どれもオツペシヤンだ。でもさういふ彼女らが普通の人々よりも報謝してくれる。私は白粉焼けのした寝